

2014年

「心の扉を開いたら」

琉球新報

2014年	1月18日	交流会参加で前向きに	知念 敏子
〃	2月15日	波瀾万丈でも希望捨てない	羽地 國雄
〃	3月15日	リハビリで生活の質向上	羽地 國雄
〃	4月19日	心に余裕「朗々介護」	阿波根京子
〃	5月17日	夫への感謝示す方法	比嘉嘉和子
〃	6月21日	一本の電話人生変える	石川 泰彦
〃	7月26日	全国大会で得たもの	金城 未子
〃	8月2日	道展願うiPS細胞研究	又吉 忠常
〃	8月16日	勇崎美枝子様へ	松村 幸子
〃	9月20日	両親との思い出づくり	米須 春美
〃	10月	病との付き合い	宮城 幸徳
〃	11月15日	DBSの手術を受けて	吉嶺 秀夫
〃	12月20日	求めていたものと出会う	松藤 純

2018. 1. 18



全国パーキンソン病友の会県支部 知念 敏子

元日の朝、目覚めもよく今年も良い1年になりそうな2014年が始まりました。私は20年前にパーキンソン病の宣告を受けました。20年の歳月は決して平たんな道のりではなく、言葉では言い尽くせないほど大変なものでした。自分の心を開いて日々を過ごすことこそが長い闘病生活を送るコツだと思えます。

そのためには家族の理解と周囲の受け入れがとても大切です。私の場合はできることは自分でやり、どうしてもできないことは手を貸してもらおう方法で日々を過ごしています。

あまり人の手を借りると、今まで自分でできていたことができなくなり、不自由な思いをすることがあります。再び自分でできるようになるには時間がかかります。機能が衰えて病気が進行することにもなります。

私は今、出掛ける時に転倒予防でつえを持ちます。スーパードでの買い物はカートを利用し、家族に手助けしてもらいます。それも生活の知恵で

交流会参加で前向きに

す。パーキンソン病と告げられた時は、周囲の目が怖くて病気を公表するのがつらかったです。道を歩くのも嫌で、家において涙を流す日々でした。そんな時、新聞でAさんの投稿記事が目にとまり「全国パーキンソン病友の会沖縄県支部」の存在を知り、友の会主催の講演会に足を運びました。

家の中にはばかりでは病気はよくなりません。友の会の交流会に参加して勉強することで荷が下りました。その後、病気を公表し、気がほぐれ気力を取り戻しました。

デイサービスを利用すると、心が再び元気になります。新聞の投稿欄に私の文章が掲載されると、職員が朝のコミュニケーションの時間に、利用者の前で新聞を読んで紹介してくれます。とてもうれしく思います。

友の会事務局長の又吉朝子さんの誠心誠意ある活動にも感謝しています。交流会の準備にボランティアの手配もしてもらい、ありがたうございます。私はこれからも病気に屈することなく、前向きに生きていきます。

全国パーキンソン病友の会
県支部の連絡先は又吉さん ☎
070(9597)4103
です。

心の扉を 開いたら

患者会・福祉団体便り

私の妻は22年前、44歳の時にパーキンソン病の宣告を受けた。パーキンソン病は難病で、国の特定疾患に指定された脳の病気だ。手足が震える、筋肉が硬くなってこわばる、歩行困難で転びやすくなるなどの症状が現れる。

発病当初は薬の量も少なく、効き目も良好で不自由なく仕事をし、日常生活を送っていた。発症3年目ごろの夏、車で出勤途中に下り坂の急カーブを曲がり切れず、対向車に衝突する大事故を起こした。この事故を契機に病気の進行が早くなった。入浴、着替え、トイレで介助が必要になり、小声になり、書く文字は判読できないほど乱雑になった。集中力や意欲に欠け、調理もできないなど、生活の質（QOL）が著しく低下した。

一番困るのは転倒だ。介護施設、横断歩道、トイレ、ベランダ、洗面所、台所でも転倒し頭部を強く打った。救急車に何度お世話になったか分からない。日常生活は悪戦苦闘の連続だ。

波瀾万丈でも希望捨てない

こうした状態を何とか緩和できないかと思案していたところ、全国パーキンソン病友の会真正支部の又吉朝子事務局長から京都府の宇多野病院を紹介してもらった。わらをもすがる思いで昨年11月、京都行きを決断した。

宇多野病院は国内でも数少ない脳神経外科専門の国立病院機構だ。薬物療法、言語療法、運動療法、作業療法を受けることになった。特に「L SVT BIG運動療法」はパーキンソン病患者に特有な運動障がいに対応するため、特別につくられた訓練法で、初期、中期の患者にはとても効果があると主治医から説明を受けた。妻は3カ月の治療期間が経過し、今もリハビリに奮闘中である。この運動療法の実践内容やその後の効果などについては、次回詳しく報告したい。

通信欄

福岡大学医学部の
坪井義夫教授（神経
内科学）を招いた医
療講演会が3月2日
（日）午後2時（受け付けは午後1時）～午後3時半、南風原町の県薬剤師会館で開催されます。連絡先は事務局長又吉さん ☎090(8294)1974。

心の扉を開いたら

患者会・福祉団体便り

パーキンソン病は薬物療養が治療の柱になるが、同じくらいリハビリも重要で、両者は治療の両輪といわれている。

京都府にある国立病院機構宇多野病院に入院している妻のリハビリ治療の見学と、退院に備え私もリハビリを学ぶ目的で、2月下旬に粉雪が舞う日に病院を訪れた。

大きな動作で体を動かす「LSVT BIG運動療法」を体験した。両手の指をしっかりと開き、床に付けて天井へ上げる動き、いすに座って足を左右に伸ばす運動、大きく腕を振りながら歩幅を広げる歩行を繰り返す。理学療法士と患者が一对一で行う。週5回、1回60分を繰り返す訓練で、筋力強化と生活の質を高めることを目的とする。妻の真剣な動きを目の当たりにした。

パーキンソン病は運動機能が落ちて口が大きく開けにくい、舌や喉の動きが悪くなり声が小さくなるなどの症状がある。そのため、言語療法士による大きな声を出す訓練「LSVT LOUDD言語療法」も必要だ。この訓練は、

リハビリで生活の質向上

腹式呼吸や単語の発声練習を繰り返すことで声帯周辺の筋肉を刺激し、言語機能を改善させる。

作業療法士が指導する筋肉や機能の回復訓練には、ベッドでの寝返り、浴槽の入り方、着替え、靴の着脱、冷蔵庫の物の出し入れ、食器を洗った後に棚に収納する動作などがある。リハビリは本人のやる気や意欲などモチベーションがとても大切であることであらためて認識した。

パーキンソン病友の会県支部の仲間たちや会報誌、情報が心の支えになっている。又吉朝子事務局長には親身になってお世話いただき、感謝の気持ちでいっぱいだ。京都大学がiPS細胞を使ってパーキンソン病を治療する臨床研究を来年にも始めるといふ新聞報道に期待が膨らむ。「冬の後には桜咲く春が訪れる」。これからも明るい希望を持って頑張る決意をしている。

通信欄

午後那覇市保健所の交流会を予定しています。5月にも講演会へ入会し一緒に学びませんか。連絡先は又吉 ☎090(8294)1974。

心の扉を

開いたら

患者会・福祉団体便り

「汝 ^そ 健やかなる時も病める時も 生涯愛することを書きますか」。この病める時の名句を、今の自分に問い掛けてみた。結婚して48年。退職後の悠々自適の人生設計を考えていた時に主人がパーキンソン病を患ってしまい、がくせんとなったのを覚えている。

スポーツマンで酒、たばこもやらず生真面目な性格。子どもにも信頼のある父親で趣味も幅広く、家庭菜園には特に精を出しており、また愛犬をよくかわいがっていた主人が「なぜなのか」。まったく納得がいかなかった。

脳の神経細胞の一部が変性し、体の動きが不自由になる進行性の病と知り、当時、変わりゆく主人の姿にもんもんと介護する毎日だった。進行状態と介護の負荷を知るため、毎日の症状を事細かくメモを取り続けるのは、あら探しをしているようで次第に気がめいってしまい、「何で自分だけが…」と考えて、身も心もずさんでいた。疲労が続き体力にも限界を感じていた。元気で充実した生活を送っていたころの主人の姿を思い

心に余裕 「朗々介護」

起こすたびに、現実とのギャップを大きく感じた。そのむなしさは脳裏を駆け巡って頂点に達し、しまいには込み上げてくる感情を抑えきれずに思い切り泣いてしまった。

「体が不自由になっても人生はまだまだ続く。考えたり、思ったりすることは元氣な時と変わらない。外見や運動能力と、人の本質は関係ない」。そう思った途端、メモは全部捨てた。「もうネガティブな考えはよそう」。心に余裕ができて、物事を冷静に見詰める自分になった。「なりたくなつたんじゃない」。今ではすっかり言わなくなつたが、本当に悔しいのは主人の方だったのだと気付かされた。

あれから11年。たくさんの愛と優しさに支えられながら、「老々介護」を「朗々介護」として、与えられた宿命を試練として受け止めていきたい。

通信欄

交流会を27日（日）に那覇市保健所3階で開きます。受け付けは午後0時半から。5月25日（日）には、講演会を那覇市保健所3階で開きます。一般受け付けは午前9時半。会員受け付けは午前10時半から。連絡は☎070(5270)1453(桑原)まで。

心の扉を開いたら

患者会・福祉団体便り

進行する病を抱えた場合、「死」を恐れるよりも当然の事実として自然と受け入れようとする気持ち働き、その瞬間の「生」を感じるのだろうか。本人よりも死の影にビクビクするのは介護者や家族の方だと思った。病人である夫はむしろ淡々としているように見えた。

夫がレビー小体型認知症と診断を受けたのが約10年前のこと。5、6年経過したころから合併症や感染症など次から次へと続く多くの病に苦しみ、1カ月単位で入院を繰り返した。その間にも在宅看護やデイケア、ショートステイなど、目まぐるしく年月は過ぎた。私の胃がん発生も重なる多難な時期もあり、夫はたびたび「もう病院には行かなくていいよ」と言ってくれた。

一日一日と過ぎることに夫の体力は減退し、嚥下障害で自分の唾液さえ飲み込めず、恐れていた胃ろう造設へと進んだ。その中で私は考えてしまった。医療の進歩の一方で、どこまで人を幸せにできるのかということ。10カ月前の早朝に、夫は静かに天国

全国パーキンソン病友の会県支部 比嘉 嘉和子

夫への感謝示す方法

に旅立った。夫がいつも欲しがっていた三角のおにぎりを食べさせてあげたかったと、今でも思う。

夫の病気を媒介にして、たくさんの人たちとの出会いがあり、数え切れないほどの感動をもらった。皆さんが心の深い所から発信した声に、私は耳を傾け続けた。その言葉たちは、これからの私の人生をきっと心豊かにしてくれることだろう。今、私は一人っきりのこの時間をどう過ごしていくかを模索しているところだ。現在はみんなと一緒に、ほんの少しばかり友の会のサポートをさせてもらっている。それが夫への感謝を表す方法だと思っている。

通信欄

5月25日（日）に心温まる講演会を開催します。このたび、大阪市より勇崎さんご夫妻をお招きします。パーキンソン病歴43年の美枝子氏の見事な闘病生活ぶりを、一緒にお聞きしましょう。場所は県総合福祉センター西棟4階で、午前10時に受け付けを開始します。資料代（一般参加）として300円いただきます。皆さまのご参加をお待ちしています。問い合わせは☎070(5270)1453(桑原)。

心の扉を 開いたら

患者会・福祉団体便り

多系統萎縮症を発症して8年目。4年目までは何とか普通に生活できていました。ところが発症してから6年目、体調が急激に悪くなってきた。宮古島から検査入院のため沖縄本島に出てきました。入院中は将来のことを考えて悲観、絶望し、気持ちが悪むばかりでした。

しかし2013年、パーキンソン病友の会に入会し、私の人生は様変わりしました。それは友の会の事務局長からの一本の電話で始まりました。

その中で、趣味で絵を描いていることを話すと、会報誌「みのり」の表紙に使おうと話が進み、それに合わせて投稿文も依頼されました。文章を書くのは昔手紙の断りでしたが、結局、書くことになりました。

その「心の扉を開いたら」に投稿しては、「と依頼され、昨年の9月に掲載されました。自分が考えてもみなかったことが次から次へと展開され、驚くばかりでした。

私の絵が会報誌の表紙絵になったことで自信がしきり、絵

一本の電話 人生変える

を描くハリー・ポッター、扉を開きたいと漠然と願っていたことが実現し、宮古島市役所ロビーで開催しました。46点の作品を出品し、100人ほどの方に書いてもらった感想は、私の宝物になっています。

「定年退職して何をすることも氣力がなく、『空の異症候群』『燃え尽き症候群』で感動することがなかったが、あなたの絵を見て涙が止まりません」とおっしゃる方もいてありがたく思い、これからは頑張ろうという気持ちになりました。

病が徐々に進行しているのも現実です。椅子に座ることもできなくなり、横になっていられることも多くなっています。

ただ痛くて体の自由が利かなくても目標を持ち、外に出て楽しいことをしようと見つけようと意思気持ちは変わありません。7月には、近くの中学校の美術部の生徒たちと共同の展覧会をする予定です。これからも一生懸命生きていきます。

友の会への入会と、そこの一人のひととの出会いが私の人生を変えました。自分が病気であることすら忘れるほどに……。パーキンソン病で悩んでいるあなたも友の会に入会しませんか。

連絡先は0070(6597)4103(又言)。

心の扉を開いたら

患者会・福祉団体便り

金城 末子

全国パーキンソン病友の会県支部

6月17日から20日にかけて全国パーキンソン病友の会の全国総会・全国大会が、北海道札幌市で開催されました。沖繩からは6人が参加。私の目的は他都道府県の方々との交流を深めることと、京都大学の高橋良輔教授の講演を聴くことでした。話題のiDPS細胞の研究はどこまで進んでいるのかと、興味深く最前列で聴きました。

講演を聴いて、すぐにでも病気が治せるくらい研究が進んでいるのでは、と切望していただけに、まだまだそこまでは進んでいないと思つと残念でしたが、薬の効きを良くすることが期待できるとの話には希望が持てました。

詳しい講演の内容は支部長にバトンタッチして、来週の「心の扉を開いたら」に書いてもらいたいと思います。

1日目は総会と分科会、交流会があり、慌ただしく過ぎました。

分科会は、4部会に分けられていて①就労問題②遊びの中でのリハビリ活動の実践③生活の工夫によるドーパミンの働き向上④音楽療法—がありました。私は音楽療法を

選び参加しました。

リズムに合わせてスクーフを大きく振ったりハンドベルを鳴らしたりしながら歌うと、体の動きが加わっていつもより大きな声が出て、自分の声に驚くほどでした。病気のことも忘れるほどに高揚した気分になり、とても楽しいひと時を過ごすことができました。

分科会への参加で音楽療法は、生活の中に取り入れたい一つになりました。

分科会後の交流会では、皆さんがドレスアップして華やかいで、ウキウキした気分になりました。

全国大会に参加された皆さんを見て気付いたことは、家族の付き添いが多いということ。病は病気になった人が一人で抱える問題ではなく、家族や社会の支えが必要だということを感じました。体は不自由ですが、外出したい気持ちを支えてくれる家族や職場にとても感謝します。

一緒に付き添ってくれた娘と旅費を援助してくれた息子たちにも心から感謝しています。ありがとうございます。

全国大会へ参加して良かったです。来年は茨城県で開催されます。ぜひ参加してみたいかがでしょうか。一つでも得るものが、きっとあると思います。

全国大会で得たもの

2014. 7. 26

2014年8月2日

心の扉を開いたら

患者会・福祉団体便り

30歳半ばにパーキンソン病を発症して、現在57歳。そろそろパーキンソン病でいるのも飽きたなあー。

いつもいつも、重たいブリックを背負っているのもつらい。パンパンに背中が張り、ずしりと重たい。ルンルンと歩きたいのに、思うようにいかないわが足。足の裏に強力な接着剤がついたように、地面から足が離れない。前に進めない。

そうかと思えば、薬がよく効いて健常者と何ら変わらないう時間もある。だが、スーパーへ買い物に出掛け、車を遠くに止めた途中で薬が切れた時が大変で、車までたどり着くまでが最悪。長い付き合いの病気だが、なんてへんてこりんな病気だろう。

新しい薬が開発されているとはいえ、自分に合うかどうか分かるまでが難しい。他の薬との飲み合わせもある。私も薬の調整とリハビリを受けるために、京都府にある宇多野病院へ3カ月入院してきた。

もつと効果的な治療法が出ないかと待ち望んでいる中で、6月に北海道札幌市で開

進展願うiPS細胞研究

会の全国大会、大会では人工多能性幹細胞（iPS細胞）の研究が進められている。京都大学臨床神経学の高橋良輔教授が講演した。

高橋教授によると、iPS細胞は近年中に行われる臨床試験の結果により、この研究の未来が左右されるということだった。試験には患者の人选が非常に重要だということも話されていた。研究チームの意気込みと臨床の難しさ、厳しさを感じた。

全国大会に向かう飛行機への搭乗でも足がすくんで歩けず、車いすに乗った。何とかこの状況を打開できるすべはないだろうか。iPS細胞の研究が早く進むことを願うばかりだ。

全国難病センター研究会の伊藤たてお氏による基調講演では、より良い医療環境の整備や生活の質の向上を目指して来年1月に施行される難病新法の説明があった。大変分かりやすく、いろいろな支援を受けるためにも声を上げて国に訴え続ける大切さも感じた。他方本願だけではなく、今私たちにできることもやっていきたいと思います。みんなの手を取り合いながら。

全国パーキンソン病友の会
県支部の連絡先は☎070
(6597) 4103 (又
吉)

心の扉を開いたら

患者会・福祉団体便り

私の両親はパーキンソン病です。発症から母が15年、父が10年を超えました。二人とも80代になった今は、自宅で介護することが難しくなり、老人ホームのお世話になっていきます。

発症後の母の世話は、ほとんど父の役目でした。母は身体の変化や衰えに、精神的な苦痛を感じていた気がします。それでも車の乗り降りの時は母のそばには必ず父がいて手助けをし、歩く時は手を引き、母のバッグは父が持つので、周りからはいつもうらやましがられていました。5年後に父までも同じ病気になるなんて思いもよらず、ショックだったことを覚えていきます。

「パーキンソン病で命を落とすことはないから心配しないで。転んだり、他の病気にかからないのが一番。楽しみをいっぱい見つけ、いっぱい笑おう」と私は一人に言い聞かせています。実際二人とも、ことし2月にあった友の会主催の北部へのバスツアーでは多くのボランティアに支えられて楽しんでいました。私たちがきょうだいも両親を喜ばせるため、5年前から両

両親との思い出づくり

親の誕生月に子や孫、ひ孫が集まってボウリングやカラオケ、食事会をしています。ことし3月にもボウリングに行きました。年々投げられる回数が減っているの、「あと何年できるかな」と考えると寂しくもありますが、二人とも周りに支えられながら楽しく投球していました。

月に1回の病院受診日は、遠出で外食するので特別な1日です。体の不自由な二人を連れて入れるお店は限られています。いろいろなお店を調べて両親との昼食を楽しんでいます。

現在、母は思うように動かない左手も使って、5人のひ孫の女の子たちへ贈る籠つくりに奮闘しています。父も好きだった三線を再び弾き始めるようになり、生き生きとしてきました。7月には思わぬ転倒により左足を骨折してしまいました。今はリハビリに励んでいます。二人のパーキンソン病が進行しないようにと願いながら、両親との思い出をいっぱいつくっていきたいと思います。

通信欄

交流会日(日)に場所(日)開催場所(日)に受付けをします。お問い合せは070(6597)4103(又吉)

患者会・福祉団体便り

全国パーキンソン病友の会県支部 宮城 幸徳

私がパーキンソン病と診断されたのは、6年前の74歳の時でした。7年ほど前、日課のウォーキングで今まで追い抜かれることのなかった小さい子どもたち、いつの間にかどんどん追い抜かれていくようになりました。そのころから左足が震えるのに気が付き、かかりつけの先生にお話ししたところ、すぐに神経内科の予約をとってくれました。その病院で「パーキンソン病ではない」と言われ、ホッとしたのを覚えています。それでも震えの症状がやむことはなかったため1年後に脳ドックを受けたところ、また神経内科への紹介状を渡されました。○病院では3日間かけて、心筋血流検査など多くの検査を受けました。そして問診後、パーキンソン病だと診断されました。

診断以前には十二指腸がん摘出、診断後もヘルニアの手術がありその上、前立腺肥大や高血圧もふりかかってきて、すごいストレスに悩まされました。昨年には加齢黄斑変性症という難病にかかっていることも分かりました。この病気には失明の恐れがある

病との付き合い

ます。ただ私が救われているのは、パーキンソン病友の会に入会していることです。難病であるパーキンソン病になり身体的苦痛は確かにありますが、友の会の皆さんと交流したりすることは本当に有り難いことです。

私は普段から県内のクリニックで毎週、難病リハビリを受けています。ことし6月ころ、京都府の宇多野病院にリハビリなどのため3カ月ほど入院・治療してきた友の会の又吉支部長の話聞きまし。自分の病気の進行具合から「今している方法とは別のリハビリを行うチャンスではないか」と思い相談したところ、同病院の水田先生に詳しいでくれました。「希望するなら京都に来なさい」と言葉があったので急いで出発し、そこで素晴らしいリハビリに出会いました。その話は次回に詳しく書きたいと思います。

通信欄

パーキンソン病の会を26日、那覇市保健所3階で開きます。受け付けは午後0時30分から。問い合わせは☎090(8294)1974(又吉)。

心の扉を開いたら

患者会・福祉団体便り

今年9月に、神奈川県で脳深部刺激療法（DBS）の手術を受けました。8月に友の会主催で「脳神経外科医から診たパーキンソン病」という演題の講演会が開催されました。その場で先生に相談し、DBSの手術を受ける決心をしました。それぐらい状態が思わしくなかったのです。

53歳のときにパーキンソン病と診断され、20年余り経過するといろいろな症状が現れ、とても苦しんでいました。講演会の翌日には沖繩赤十字病院で説明を受け、その後一人で東京に飛び立ち、羽田空港では三女と夫が出迎えてくれました。9月1日に入院し、12日に手術を受けました。

手術を受けるまでの私の状況を書きます。歩くときに右手が振れないなど体の調子が思わしくないと感じていたら、家族からも「お父さん何かおかしいよ」と言われまじた。病院でも病名がはっきりせず、病院をはしごせざるを得ませんでした。そのころ、いろいろな症状が出ていました。仕事をしなければいけないとの強迫観念にかられ、夜中も不自由な体のまま仕事を

DBSの手術を受けて

2014年(平成26年)

11月15日 土曜日

通信欄

11月24日、名桜大学で講演会を開催。国立宇多野病院院長の水田英二先生が「パーキンソン病の治療について」と題して講演します。受け付けは午後0時30分。問い合わせは又吉 090(8294)1974(午後以降にお問い合わせください)。

していました。年がたつにつれ、震えもひどくなりました。便秘にも悩まされ、あらゆる工夫をしても体が思うようになりませんでした。悪夢にうなされたり、うつ状態が出たり、夜中にキーボードをたたいたりして、家族にも迷惑を掛けていたので、DBSの手術を受ける決心をしました。手術は朝8時から夜8時まで12時間もかかりました。娘夫婦が手術中ずっと待っていてくれて、感謝しております。何度も病院に足を運んでくれた家族の協力がなかったらできないことでした。結束力も強まったように思います。11月3日に退院し、沖繩から迎えに来てくれた妻と家路に着きました。手術を受けて良くなったことは、自分の意思に関わりなく身体が動いてしまう症状がなくなったこと、薬の量が減ったことなどいろいろあります。早く沖繩でもこうした手術ができるよう切に願います。

心の扉を開いたら

患者会・福祉団体便り

妻がパーキンソン病と診断されて20年が経過しました。私が妻の介護を始めて10年近くになります。最初のうちはちょっとしたことを手伝えれば生活できていましたが、最近ではほとんどのことが介助なしではできなくなっています。

純 松藤 全国パーキンソン病友の会県支部

仕事をしながら炊事、洗濯、介護をするのはとても大変です。でも妻はもつと大変だろうと思えます。自分で思うように身体を動かせない。やりたいことができない。「自分の面倒まで見てもらい、申し訳ない」と妻は私に言います。「そんなの気にしなくていいよ。君が僕の立場だったら同じようにするのではないかと」言ってもどこか遠慮してしまっているようです。妻の悩みやつらなことで、きつときついだろうなと想像はできても本当のつらさをきくことは私にはよく分かりません。なぜなら私はその病気を経験したことがないからです。家族にも悩みはあります。1人だとうしたら良いのか分からなくなることもあります。でも患者や家族同士なら、同じ境遇だからこそ分か

求めているものと出会う

2014. 12/20

り合えることがあると感じています。

私たちが友の会を知ったのは、主治医の先生の紹介からでした。「どんな集まりだろうか」と思い切って参加してみました。すると参加されている皆さんが、明るく生き生きと笑っていることに驚きました。患者やご家族ですから、いろいろつらいこともあると思いますが、平たんな道だけではないと思います。それでも「こんな時はこうしているよ」と工夫をしていることや悩んでいることなどをお互いに言い合っています。助け、助けられている様子を見て、私が求めていたものがそこにあると分かり、すぐに入会しました。でも私たちは石垣島に住んでいます。だからたまにしか交流会に参加できません。そのたまの機会にみんなに会えることを楽しみにしています。

友の会県支部に出会え、1人ではなく仲間がいることが心の支えになっています。県内にもいろいろな病気の会があります。それぞれの病気の患者さんや家族の方がいらっしやいます。きつと素晴らしい出会いがあると思います。一歩足を踏み出して参加してみませんか。全国パーキンソン病友の会県支部の連絡先は090(8294)1974(又吉)。